

Title	「政治的正義」の成立過程
Sub Title	Process of formation of political justice by William Godwin
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1971
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.64, No.6 (1971. 6) ,p.387(29)- 394(36)
JaLC DOI	10.14991/001.19710601-0029
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19710601-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明らかであろう。その対決の仕方がどのような形をとるか、変革の様式がどのようなものになるかは、それぞれの国の条件によって規定されるであろう。

—1971. 4. 22—

「政治的正義」の成立過程

白井厚

1. はじめに

ウィリアム・ゴドウィンといえば、その主著は言うまでもなく近代アナキズムを確立した「政治的正義」だが、その他にも実に50冊以上の著作がある。すなわち、「人口論」などの経済学、「イギリス共和制の歴史」などの歴史学、「研究者」、「人間考」などの社会評論、「ロッキンガム党擁護」、「グレンヴィル・ピット法考」などの政治評論、「セミナリ説明書」などの教育論、ピット、ウルストンクラフト、ミルトンなどの伝記、「ケイレブ・ウィリアムズ」、「聖リオン」などの小説、「アントニオ」などの戯曲、あるいは子供向けの歴史や文法書までも書いた。さらにまた、彼の活動も多方面にわたるので、彼が人類の歴史に貢献した分野は、次のように極めて多様なものと言えよう。

アナキズム史——近代アナキズム思想の体系を樹立した思想家として。

社会主義・共産主義思想史——私有財産、資本主義を批判、徹底した共産主義財産論を展開し、リカード派社会主義者やロバート・オウエンたちに大きな影響を与えた思想家として。

経済学史——マルサスに「人口の原理」執筆の契機を与え、また彼との人口論争を行った当事者として。

政治思想史——“イギリスにおけるフランス革命”期の急進主義的政治論の極限を代表する思想家として。また現代に至るイギリス政治思想への影響者として。

労働運動史——ロンドン通信協会や初期労働運動への影響者として。

女性解放思想史——結婚制度の否定者、女性解放思想の先駆者メアリ・ウルストンクラフトの理解者、夫、そして新しい結婚形式の実践者として。

イギリス革命史——ピューリタン革命を重視し、ウィッグの革命観への転換を行った歴史家として。

文学史——ロマン派詩人たちに哲学を与え、特にシェリに圧倒的な影響を与え、彼の義父となった人として。またフランス革命期の思想小説の代表者、アメリカ文学の源流として。ラムの「シェイクスピア物語」などの出版者として。

教育思想史——ルソーを越えた近代的教育思想の最初の主張者として。

こうした多方面の著作活動については、現在それぞれの分野で研究が進み、再評価されつつあるが、多くの著作の中でも特に著名でかつ重要なものと言え、比較的初期に書かれたにもかかわらず、やはり「政治的正義」に先ず指を屈しなければならない。それは、政治・道徳・法律・宗教・歴史・経済・人口・財産論など広汎な領域に及ぶゴドウィンの思想を体系的に提示しており、ゴドウィンの思想は以後も変化発展するとは言え、その根本思想、原点を構築する内容においても、またその強烈な影響力によっても、まさしく主著たるの面目を失わないものである。

「政治的正義」は、しばしば不当に無視されてきたにもかかわらず、“イギリスにおいて、1793年にゴドウィンが登場し、あの真に注目すべき著作「政治的正義」を公刊した。ゴドウィンは、この書物によって、政府のない社会主義の、すなわちアナキズムの最初の理論家となった。”というクロボトキンの規定、“総じて言えば、ゴドウィンは近代における科学的社会主義者中の最初の人と見られるべき人であって、彼の学説

注(1) P. Kropotkine, *La Science Moderne et l'Anarchie*, 1913. 「世界の名著・ブルードン、バクーニン、クロボトキン」所収、勝田吉太郎訳、453ページ。

中には、すでに近世社会主義およびアナキズムのすべての思想が胚胎している⁽²⁾ というアントン・メンガーの指摘、“その哲学的完全さと、その厳密にして大胆な——たとえそれがいくぶん稚氣を帯びているとはいえ——論理と、その驚くべき明晰な説明とによって、「政治的正義」は、確かにその著者に、社会主義的思想におけるアダム・スミスと見なされるべき資格を与えるだろう。”という H. O. フォクスウェルの賞讃、“近代の二人の偉大な実際の哲学者、ベンサムもゴドウィンも、特にゴドウィンは、プロレタリアのほとんど独占的な財産⁽⁴⁾”であったという F. エンゲルスの言及などからもうかがわれるように、社会思想上大

き意味を持っていた。それは、“イギリスにおけるフランス革命⁽⁵⁾”と呼ばれるような、産業革命・農業革命の進行に対して巨大な政治革命・思想革命が交錯する興味深い時代において、当時の時代精神を最も急進主義的に集約し、急進主義の論理の極限を展開して、啓蒙思想から社会主義・共産主義へ、ブルジョア功利主義から市民社会の根源的批判へという重要な結節点を形成した。そして、歴史的に見れば、「政治的正義」に結晶するゴドウィンの思想形成過程は、そのままに近代アナキズムの成立を物語るものであり、財産論を中心に展開された共産主義は、後のクロボトキンの思想に類似していたというばかりでなく、マルクスが「ゴ

注(2) Anton Menger, *Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag, in geschichtlicher Darstellung*, 3. Aufl., 1891, S. 40. 森戸辰男訳, 72ページ。

(3) H. O. Foxwell, *Introduction to The Right to the whole Produce of Labour*, translated by M. E. Tanner, p. xxix. 前掲訳 351ページ。

(4) F. Engels, *Die Lage der arbeitenden Klasse in England*, 1845. *Werke*, Bd. 2, S. 455. 訳全集 2, 475ページ。ただしこれは若き日のエンゲルスの書であることに注意。殊にベンサムの評価には問題がある。マルクスとエンゲルスは、1845年に外国社会主義著作家名著双書 „Bibliothek der vorzüglichsten sozialistischen Schriftsteller des Auslandes“ として、フリエ、オウエン、サンソンモン派、モレリなどの著作の中に、ゴドウィンを加えて出版するという計画を立てたことがあるが、これは実行されなかった。エンゲルスは、ゴドウィンについて次のように言っている。“ゴドウィンの「政治的正義」は、共産主義に解れたところでは多くの素敵なものを持っているが、政治的、ブルジョア・社会的見地からの政治批判として、はずすことにしたい。きっと君が、完全な政治批判を書くだろうから。ことにゴドウィンが、その著書の末尾で、人間はできる限り社会から解放され、そして社会を一つの奢侈品としてのみ使用するべきである（「政治的正義」2巻8篇、8章への附録）という結論に達し、しかも一般にその結論においてこれほどはっきりと反社会的であるからには。だが、僕がこの書を抜き書きしたのはずっと以前で、まだ非常に無知だった時のことだし、いずれにせよもう一度研究してみなければならぬのだから、その中には当時僕が発見した以上のものがひそんでいてということ、容易にありうることだ。しかし僕らがゴドウィンを採るなら、その補足たるベンサムも入れないわけにはいかない。こいつはおそろしく冗漫で理論的なのだが。” Engels an Marx in Brüssel, 17. März 45, *Werke*, Bd. 27, 1963, S. 25. 若きエンゲルスのゴドウィン理解は、彼自身認めるように、十分なものではなかった。またマルクスは、アナキズムやユートピア思想から多くの養分を吸収しているにもかかわらず、奇妙なことにゴドウィンをほとんど読まなかったようである。なお、エンゲルスはベンサムをゴドウィンの補足として理解していたことに注意。二人をフランス唯物論をつぐ二様の功利主義者として理解していたのであろう。たとえば「イギリスの状態」においても、つぎのように言う。“他方では、ウィリアム・ゴドウィン（「政治的正義」1793年）が、共和制の政治制度を根拠づけ、また J. ベンサムと同じところに功利の原理——これは、公益は最高の法なり（*Salus publica suprema lex*）という共和主義の原理からその正当な結論をひき出したのである——をうちたて、国家は害悪なり、というその命題によって、国家の本質そのものに攻撃を加えた。ゴドウィンは、まだ功利の原理を全く一般的に解しており、これは市民が個人的利益を顧みずにもっぱら公益のために生きる義務であると見ている。” F. Engels, *Die Lage Englands, I. Das achtzehnte Jahrhundert*. K. Marx-F. Engels Werke, Bd. I, 1956, SS. 566-7, 邦訳全集第1巻 621ページ。

(5) “イギリスにおけるフランス革命”については、拙著「ウィリアム・ゴドウィン研究」1964年、110ページ以下、拙訳「メアリ・ウルストンクラフトの思い出」190ページ以下、H. N. Brailsford, *Shelley, Godwin, and their Circle*. P.A. Brown, *The French Revolution in English History*, 1916. この時代の社会運動については、G. D. H. Cole, *A Short History of the British Working Class Movement 1789-1947*, Chap. 3, フランス革命をめぐる論争については、*The Debate on the French Revolution 1789-1800*, edited by A. Cobban, 1960. 政治の動きについては、William Thomas Laprade, *England and the French Revolution 1789-1797*, John Hopkins University Studies in Historical and Political Science Series, xxvii. E. J. Hobsbawm, *The Age of Revolution: Europe 1789-1848*, 1962.

(6) “相互扶助論”は、理論的なアナキズムの其の開始を告げる著作、ゴドウィンの「政治的正義」のうちに遠く起源を持っていた論争に対する、クロボトキンの貢献であった。普遍的仁愛というゴドウィンの概念は、相互扶助というクロボトキンの理念と異なるものではなく、その上にゴドウィンは、もし人間が理性的にふるまい、社会的に役に立つ仕事の分担

一タ綱領批判（1875年）において示した共産主義の第二段階の描写を、実に80年以上も前に先取りしていたのである。

2. ゴドウィンの思想形成

ゴドウィンは、1756年に、ケンブリッジシャーのウィズビーチで非国教徒の家に生まれた。その生地は、G. ウドコックの描くところによると、古い商業社会が栄えており、その地方はイングランドの最も繁栄した部分にあった。肥沃な小麦畑は独立農民によって耕作され、近くのノリッジでは毛織物が最も重要な繊維産業であった。毛織物業は屋根裏部屋で働く織手（small weaver）によって行われ、彼らは生産物を富裕な地方商人に売った。この働き手の間には、中世都市以来の自由の伝統があり、常に商人や権力から独立の気概を示していた。今日でもノリッジには周囲の地域には見られぬ気質が残っているので、ゴドウィンの時代には、農夫や職人はもっと独立の熱情を持っていたに違いない。それが彼らを独立派の運動に参加させ、水平派の教説に耳を傾けさせた、彼らの中で宗教上の異端は最も激しく、宿命と自由意志、アリウス主義と三位一体説などの神学上の討論が徹底的に行われた。そうした自由の伝統に加えて、この地は工業化の波からは取り残され、近辺の小生産者たちは北方の産業資本に押えられて、多く没落の過程にあったため、これらの地は、

18世紀における急進主義運動の中心地となった⁽⁸⁾。“彼の周囲の農夫や職人たちの行動を何百年も動かしてきた思想をその論理の結論まで押し進めた偉大な自由の哲学者を育てるのに、これ以上の環境は望めないであろう。”

ゴドウィンの思想の中には、資本主義制度を道徳的な見地から鋭く批判し、簡素な生活様式を讃美し、独立・自由・安全を強く求め、個人の有用性と必要にもとづく財産の分配を説くなど、また下層階級の暴力的運動を嫌悪し中間層の知識人に期待するなど、産業革命のただ中であって没落の道をたどらざるをえなくなった独立小生産者の願望が色濃く反映されている。彼は1783年、27歳の時にロンドンに出て、以後そこに定住するようになるのだが、こうした青年期に至るまで育った地の環境が、彼から体制依存の心理を喪失させ、彼の思想の基盤を形成したといえよう。

ゴドウィンの家庭は、祖父以来の聖職であり、父は中流下層の熱心な非国教徒牧師として、極めて厳格な宗教的雰囲気の中に、カルヴィン派の伝統に立つ形而上学的非国教徒神学を彼に教え込み、彼の母も、また激しい性格と信仰をもって、この牧師たるべく予定されていた子供の教育に当たった。彼が非国教徒の中で育ったということは、後年の彼の思想に大きな関係がある。というのは、非国教徒の人びとは少数で、体制から疎外された存在⁽¹⁰⁾であり、子供が生まれても国教の儀式に従って洗礼せねば届出できず、結婚するにも墓地

義務を遂行し、浪費的な活動を除き、科学的発見を一般の利益のために利用するなら、万人は福利を享受し、しかも精神的自我の発展のための余暇を持ちうるであろうという主張を行なった。このような議論と、「パンの略取」において展開された議論との相似は、明らかである。” George Woodcock, *Anarchism, a history of libertarian ideas and movements*, 1962, p. 198. 拙訳 I, 296ページ。“クロボトキンは晩年をイギリスで過ごし、そこでゴドウィンの思想を知って、自分の思想との類似性に気づいた。事実この両者には、一世紀の時代を隔てつつも、共産主義、分業批判、啓蒙的性格など、多くの類似点がある。ゴドウィンに始まった近代アナキズムは、その対極にシュティルナーの徹底的なエゴイズムを生み、ブルドンにおいて社会性を獲得し、バクーニンにおいて行動の経験を積み、その反省を含めて、クロボトキンにおいて再びゴドウィンの世界に戻ったと言えるだろう。円環はらせん状に閉じられ、その後においては大きな思想家は生まれていない。” 拙稿「アナキズムの系譜と復権」、「評点」1971年5月号所収。

注(7) この点については、拙著「ウィリアム・ゴドウィン研究」参照。

(8) たとえば、18世紀末には、Sheffield Association などと並んで、ノリッジには選挙法改正をめざす多くの急進的政治団体が生まれた。Cf. P.A. Brown, *The French Revolution in English History*, 1916, p. 63. E. Lipson, *The History of the English Woollen and Worsted Industries*, 1921, p. 249.

(9) G. Woodcock, *William Godwin, a Biographical Study*, with a foreword by Herbert Read, 1946, pp. 3-4.

(10) イギリスでは王権と教権が密接に結びついているため、プロテスタントなどイギリス国教に従わない非国教徒は、1660年の王制復古後、“王以上に王党的”といわれた騎士議会によってクラランダン法（The Clarendon Code）以後強く迫害された。この法は、チャールズ2世およびクラランダン伯が宗教上の寛容を希望したにもかかわらず、トーリー党の党派的意図により実施された。その内容は、市町村の公吏は国教徒であることを定めた地方自治体令（Corporation Act, 1661）、祈禱書によらぬ礼拝のために5人以上集まることを禁じた Conventicle Act, 1664、教会や国家の政治を改革するいかなる企てもしないことを誓約せよと、非国教徒は町の周辺5マイルに立ち入れず、公私立校の教職につけない Five Mile

を得るにも彼らと相容れぬ教会の権威に従わねばならなかつた。大学に進むことも制限され、従って高い社会的地位からは閉め出され、屈辱を感じた彼らは、ますます完全な宗教的自由を求めることとなる。

ゴドウィンは後に宗教を捨てて無神論者となるのだが、厳格なカルヴィン主義の教義が彼の思考方法に大きな影響を及ぼしたことは否めない。それについて、マックス・ベアは次のように言っている。

“ゴドウィンを理解するためには、彼が本質的にカルヴィン派の牧師であったことを、常に念頭に置かなければならない。彼の唯物論は、逆立ちしたカルヴィン派の神学である。神は理性である。宿命が必然もしくは決定論であり、神の摂理は因果関係であり、神の王国が倫理的共産主義である。彼の批評は、非国教徒の長い説教である。それは、意気はつつたる、長たらしい、時には力強い、だが常に抽象的な推論の上に築かれた説教である。彼は、社会についての歴史的考察を、社会についての哲学的考察と比較すると、価値少ないものとした。彼には哲学的考察が、より高度の秩序をもった、はるかに本質的な重要性を持つもののように見えたのである。(「政治的正義」第2篇第1章)⁽¹³⁾”

ベアの表現は、いささか割り切り過ぎてゴドウィンのすべてを語るものではないけれども、自由、平等、正義、個人主義、非暴力、誠実、公平、真理の力に対する信念、国家に対する不信心、そして一切の権力を排し、演繹的な、理性的な、厳格な必然に支配される

彼の体系は、確かにカルヴィン神学を土台とするものであろう。ゴドウィンは、10代のはじめから、サンデマン主義者(Sandemanian)の一人となったが、この派は、Robert Sandeman (1718-71)の義父 John Glass がスコットランドに創設したもので、初代教会への復帰を主張、毎週の聖餐、愛餐、洗足、共産生活を唱え、カルヴィン派の中でも特に激しいものであった。⁽¹⁴⁾ゴドウィンは23歳で Hoxton の the Dissenting Colloge を卒業してのちも、26歳まで、10年間以上もこの教義を信じていたのである。G. ウドコックは、“政治的正義”の多くの面が、世俗化されたサンデマン主義以上のものではほとんどなかった”とまで言って、サンデマン派の人たちが、教会による支配の正当性を否定し、国家との無関係を主張し、任命された牧師が一人もいない独立した集会組織を確立し、財産共有の理想を信じ、剰余は必要に応じて分配されるべきだと考えていたことを指摘している。

“サンデマンの教義は、「政治的正義」という最終的な形態に貢献した多くの影響の中の一つでしかない。しかし、それは明らかにゴドウィンの体系におけるいくつかの最も重要な要素のうちで先ず挙げるべき源泉を含んでいる。それはまた、ゴドウィンが、後年発展させた〈反権威主義的〉共産主義的思想の一、二の形態に少年時代から親しんでいたことを証明している。彼がアナキスティックな思想家になったのは、突然の転向によってではなく、彼の感受性の強い心が長い間親しんできたいくつかの概念

Act, 1665. の三つからなる。こうして抑圧された非国教徒は、宗教的自由を市民的自由に拡張し、議会改革を進めた。Cf. R.G. Cowherd, *The Politics of English Dissent, the religious aspects of liberal and humanitarian reform movements from 1815 to 1848*, 1959, p. 8. その個人主義的反権威的教義と、産業革命の過程で一部の社会的地位が向上したことは、彼らをして18世紀末議会改革運動の中核たらしめ、ウィッグ党に有力な基盤を与えた。また彼らは多くインテリで、ブライスやブリストリが率いたユニテリアン派は言うまでもなく、ゴドウィンなどの牧師出身者、ペインなどのクエイカー教徒の子を含めれば、急進思想家の多くは非国教徒に関係があり、Revolution Society その他多くの団体をつくり、たとえばフォックスなどもこれとの連繫を策すほど大きな力を持っていた。名譽革命体制の経済的側面および統治機構に対する彼らの批判には、その宗教的信条が大きく影響している。非国教徒救済法は時の政治問題の一焦点であり、1773, 87, 89年など何度もこの法案が上程否決され、1844年の The Nonconformist Chapel Acts によって、ようやく法律上の差別が撤廃された。

注(11) 非国教徒専門学校の合理主義教育、研究の自由の尊重、進歩主義などについては、天川潤次郎「産業革命とブルジョア教育——非国教徒専門学校を中心として——」、『経済学・歴史と理論』(堀経夫博士古稀記念論文集)所収、1966年、参照。

(12) R. G. Cowherd, *op. cit.*, pp. 22-3. 非国教徒の伝統と English Jacobin については、L. P. Thompson, *The Making of the English Working Class*, 1963, pp. 51-54.

(13) Max Beer, *The History of British Socialism*, 1920-1, vol. I, p. 115. 大島清訳(一) 206ページ。

(14) J. グラスは、ゴドウィンの言葉を借りると、“この地方の有名な聖徒であり、カルヴィンが普通の人間を99人まで地獄にやったのに対し、このグラスは、さらにカルヴィン主義者を99人まで地獄へ追いやったほどの、激しい信仰の持ち主”であった。C. K. Paul, *William Godwin: His Friends and Contemporaries*, 1876, vol. I, pp. 10-11.

から、論理的な結論を徐々に導き出すといった過程を通じてであった。この意味において、フランスの社会哲学者たちや、ジョン・ロックやトマス・ペインのようなイギリスの著作家たちでさえもが、彼に新しい思想を与えたというよりは、むしろ、非国教徒の伝統を経て彼のものとなった個人主義を発展させることを可能にした合理的な論拠と論理的な枠組を与えたのである。彼は、急進的なかたちの非国教徒から、宗教的な要素——われわれのすべての行動は天国のための準備であるという意識——以外のほとんどすべてを受け継いでいる。⁽¹⁵⁾

しかし、このような強い影響を受け、非国教徒の牧師として活動するにもかかわらず——あるいはそれゆえに——ゴドウィンは宗教は恐怖と威圧にもとづく超自然的な専制であって、神こそはその座を去らねばならぬ不当な暴君だと考えるようになり、聖職者の道から180度の転回を遂げて、無神論・唯物論そしてアナキズム・共産主義にまで到達する。その転機を、先ずゴドウィン自身の口から聞こう。

「政治的正義」初版の序文によると——

“著者の心が現在の意見に至った進歩のみちすじを描くことは、無益ではあるまい。この意見は、何か突然の空想的な感激によって示されたものではない。政治上の研究は、長い間、著者の注意のかなりな部分を占めてきた。君主制は本質的に腐敗した政治の一種だとさとしたのは、今から12年前のことである。このような確信を得たのは、スウィフトの政治上の著作と、古代ローマの歴史家たちを熟読したおかげである。またほとんど同じところに、人間性についていくつかのフランス人の作品からも多くの刺

戟をあわせ得たのであって、それらを、「自然の体系」、ルソーの著作、エルヴェンヌスの著書という順で手に入れた。この著書を計画するずっと以前から、私の心は、正義、感謝、人権、約束、誓約、意見の全能について、ここに示されているいくつかの考察に精通するようになっていた。⁽¹⁶⁾

そして、フランス革命勃発の年のノートには、次のように記している。

“これぞフランス革命の年であった。私の心は、自由のために湧き起こる感情で高鳴った。私は、原理において9年前から共和主義者であった。私は、ルソー、エルヴェンヌスその他フランスで最も人気のある著作を、非常に満足をもって読んできた。その中に、政治論題について多くのイギリス人の著作におけるよりもっと普遍的な、純粋に哲学的な体系を認めた。そしてこのような著作によって導かれる革命に対して、希望を燃やさないわけにはいかなかった。⁽¹⁷⁾”

すなわちここに明らかなことは、ゴドウィンは1781年ころから君主制を批判し共和主義者となっていたこと、政治や人間に関してはエルヴェンヌスやドルバックなどフランス啓蒙思想の唯物論、功利主義に非常な傾倒を示したこと、それに反して非国教徒神学については何ら評価するところがなかったことである。年代的に見ると、1781年(25歳)にスウィフトとラテン歴史家たちの影響で共和主義者となったゴドウィンは、翌年にはフランス唯物論、特にドルバックの戦闘的な無神論を読んで、信仰に動揺を来たして理神論者となった。だが理神論は全く異質だったので、さらにその翌年には、ユニテリアン派の代表者 Joseph Priestley の

注(15) G. Woodcock, *Anarchism*, p. 62. 拙訳 I, 88-9 ページ。

(16) William Godwin, *Enquiry concerning Political Justice, and its Influence on Morals and Happiness, photographic facsimile of the third edition corrected, edited with variant readings of the first and second editions and with a critical introduction and notes*, by F. E. L. Priestley, 1946, vol. I, pp. ix-x.

(17) C. Kegan Paul, *William Godwin: His Friends and Contemporaries*, 1876, vol. I, p. 61.

(18) ゴドウィンはスウィフトに非常な心酔を示し、「政治的正義」や「研究者」において、しばしば *Gulliver's Travels*, *On Mutual Subjection*, *A Tale of a Tub*, *Draper's Letters*, *The Conduct of the Allies*, *An Essay on Popular Discontent*, *A Proposal for Correcting, Improving, and Ascertaining the English Tongue* などに触れている。この偉大な諷刺家は、一種のニヒリストであって、その時代の政治、宗教、社交界、庶民生活などに対して、徹底した非難、憤怒を示した。だが、彼は進歩の観念も、現実を逃れるべき哲学も持っていない。スウィフトは明らかにアナキストではない。実際、この2人の気質も思想も非常に異なるので、彼のスウィフト解釈は、彼自身の完全可能論者としての先入観によってゆがめられていた。” J. A. Preu, *The Dean and the Anarchist*, 1959, p. 15. 「政治的正義」においては、スウィフトの蓄積財産攻撃として「ガリヴァ旅行記」の第4篇6章が指摘されているし、そのフレイヌムの国は、ゴドウィンの理性の国の原型と考えられている。Cf. J. Preu, “Swift's Influence on Godwin's Doctrine of Anarchism,” *Journal of the History of Ideas*, June 1954.

Institutes of Natural and Revealed Religion の影響で、キリストの神性、教会とその教義を否認し、意志の自由を主張する Socinianism を採り、また同年には、“政府は人びとを有徳にも幸福にもすることがほとんどできない”というアナキズムの結論に早くも達していた「セミナリ説明書」(An Account of the Seminary that will be opened on Monday the Fourth Day of August, at the Epsom in Surrey, for the Instruction of Twelve Pupils in the Greek, Latin, French, and English Languages, 1783.) を発表した。そして「政治的正義」執筆の4年前である1787年、31歳の時に、親友トマス・ホルクロフトの影響でついに無神論に到達する、という軌跡を描く。

ゴドウィンの思想の主要な要素が、非国教派神学かフランス唯物論かという問題は論争のあるところであるが、「政治的正義」第3版に掲げられた「要約」に、道徳的、政治的研究の目的は快樂または幸福の増大であり、その増大こそが正義であると強調したことで明らかなように、彼の説は、ロマン派に通ずる理想主義やプラトニズムの傾向なども見いだされるにしても、基本的には功利主義、唯物論、必然論の立場に立っていた。こうして彼は、功利主義というブルジョア的な人間観の成熟を受けとめ、そこにおける個人主義、自由主義、進歩の観念などを大きく発達せしめて、アナキズムにまで至ったのである。功利主義は、資本主義的営利関

注(19) T. Holcroft は、当時の成功せる劇作家、小説家で、馬番、靴屋、旅役者など変転極まりない生涯を送り、立憲思想普及協会々員、ロンドン通信協会の指導者となり、国事犯の疑いで逮捕された。シュリ夫人によれば、“厳格で短気”で、愛すべき情熱家であり、当時のロマン派の詩人たちとも通ずる考えを持ち、*Anna St. Ives*, 1792. において革命的な理想を表明し、ゴドウィンやコンドルセが萌芽的に抱いていた理性による人間変革の可能性を確信していた。当時すでに50歳で、豊富な人生経験と個性を持ち、ゴドウィンとは毎日のように会って、音楽や美術の専門知識を与え、「政治的正義」にも大きな影響を及ぼした。その交際は、1809年ホルクロフトの死まで続いている。

注(20) プリーストリーは、次のように言っている。

“Roussin は、ゴドウィンの思想において最も特徴的なものは、イギリス・プロテスタンティズムの伝統的遺産だと言う。これはある程度真実であるが、二つの点であまりに単純化している。第一に、イギリス・プロテスタンティズムの思想はすべてが同一ではなく、非国教徒においてすらさまざまな傾向がある。第二に、非国教派の思想に共通する要素を選んでも、ゴドウィンを説明することはできない。彼はいろいろな、時には対立するいくつかの伝統を身につけている。彼が育った非国教派の中でも、彼に対する影響は一律ではない。彼の思想は、初期の信仰の影響であるのと同時に、それに対する反抗の結果でもある。

個人判断の権利の主張、教育の国家統制の拒否、独立した真理の力の信仰、完全な誠実の擁護、平等の理論——これらは非国教派の書物に繰り返されたテーマである。けれども、Woodhouse 教授が示したように、ビュリタンの思想にはいくつかの派があり、内部で争っている。いろいろなビュリタンの団体が主張する自由と平等の範囲は“分離”の程度によって違っているので、単純に非国教派の伝統といえるような思想をもった団体は、18世紀には存在していない。

ゴドウィンは、結社や政治的立法手段による問題の解決に反対して、非国教派の伝統と矛盾していた。非国教派のブライスだけが、彼にプラトン主義を教えたのではなく、非国教派以外の個人主義思想も存在した。ギリシャ思想も考慮せねばならないし、政府のない社会についてのいろいろな人の考えも見落してはならない。ゴドウィンの思想の複雑さは、そのすべての源をたずねて初めて理解されるので、彼の説の特徴をイギリス的と考えたルサンは、ゴドウィンが読書によって得たものを見過ごし、フランス的と考えた Gourg は、ゴドウィンが伝統によって得たものを見落してしまっただのである。” F. E. L. Priestley, *Introduction to Political Justice*, V. Godwin and the Dissenting Tradition.

における国家権力や宗教に対する鋭い批判精神を失ってしまったのを見る時、エルヴェンヌスやドルバックの功利説とその革命性を真に継ぐものは、ベンサムではなくゴドウィンだと言うべきであろう。

ゴドウィンの思想はかなり複雑なものであって、もちろん非国教派神学とフランス唯物論のみをもって語り尽くすことはできない。特に英仏の啓蒙思想におけるロックの固有観念否定説とルソーの政府・私有財産批判、パークやペインなどのアナキズムの思想の成長は重要であるし、ステューヴンは三つの源泉を挙げて、彼の体系はスウィフト、マンデヴィル、古代ローマの歴史家から古い制度に対する批判を、ヒュームとハートリーから古い理論に対する批判の武器を、ルソー、エルヴェンヌス、ドルバックから革命的熱情を学び取った革命的理論の最も端的な表現であり、パークに對立する原理を、他のいかなる著作よりも明らかに教えるものだといっている。またプラメナツは、エドワード、ハートリー、ドルバック(決定論)、エルヴェンヌス(環境論)、ルソー、マブリ、オウグルヴィ(アナキズム・共産主義)、ヒューム(社会契約説批判・功利主義)、ペイン(社会と政府の区別)を数え、アレヴィは、ヒューム、ハ

ートリー(決定論)、ハートリー(観念連想説・必然論・進歩の観念)、エルヴェンヌス(理知主義)を挙げて、彼らの全部が功利主義者であったから、全部からそれを得たと述べている。さらにプリーストリーは、「政治的正義」を単にロック、エルヴェンヌス、ルソー、ドルバック、マブリ、ペイン、ウォーレス、ベッカリア、モアの断片に分類するのは誤りだとして、ブライスの非国教神学、プラトン、パークリ、アクイナス、ミルトン、ソクラテス、ストア哲学、シャフツベリイ、ハチスン、フォーセット、ニュートン、パーク、ホルクロフトとの関連を論じている。ハズリットに至っては、ゴドウィンはストア派とキリスト教的哲学者の混合物とまで言っている。しかしこうした多くの諸要素を単に寄せ集めるだけではなく、アナキズム・共産主義の結晶を生みだすまでに燃焼させたものは、もちろんフランス革命の勃発であった。

先の年代記的な説明でも明らかなように、ゴドウィンの思想は必ずしもフランス革命によって触発されたものではない。そのことは、革命に感動しつつも、暴力、群衆の激情などを常に否定していたこと、革命が反動期に入っても、その論調を変えようとしなかった

注(21) ゴドウィンにおける本質観念の否定と進歩の観念については、拙著「ウィリアム・ゴドウィン研究」231—2ページ参照。

注(22) ゴドウィンはルソーを、“政府のもつ不完全さこそが人類の悪の永遠の根源であると教えた最初の人”“政府はいかに改革されても人類に利益を与え得ないと認識した”と賞揚したが、「社会契約論」と「ポーランド憲法草案」は政府を肯定しているため、これを斥けた。この二人の異端思想家の間には、共に小生産者的な資本主義批判でありながら、次のような相違点がある。ルソーは自然状態とアナキズム社会を賞め讃え、政府を腐敗の極として非難しながらも、なおその救済を新しい政治組織に求めたが、ゴドウィンは大胆にも、あらゆる形態の政府は亡び去らねばならぬと宣言した。ルソーの一般意志が法として外側から個人を規制し、全体主義や国家主義と結びついたので対し、ゴドウィンは個人の利益から出発して全体の利益を考える universal benevolence を主張し、あくまで個人的判断にもとづく規範であって、いかなる意味でも全体主義的傾向を見せることはない。またこの二人の置かれた社会が全く異なるので、産業革命成熟期のゴドウィンがルソーの見解をそのまま受け容れるはずもなかった。全文明制度をそのまま教い難い退歩だと理解するためには、イギリスの資本主義はあまりにも若々しかった。彼は、ルソーが原始社会に描いた自由平等の楽園を、未来に実現可能な社会に想定した。無知と無能によって与えられていた平和を、高められた理性と完全な人格によって繁栄する優雅な卓越した情趣に置き換えた。だが、権力と私有財産の上に築かれた文明の疎外状況を鋭く指摘し、繁栄の虚偽性を痛撃し、このような政治制度の弊害を脱した理想社会として、一切の協業、共同の食事、共同の生活をも排するという構想は、その個人主義、独立小生産者的意識に現われるように、依然としてルソー的ロマンティズムの流れを汲むと云えよう。それが、産業革命の技術革新を背景とし、全体的人間の実現を誇る高度の知識人の集合体であるとしても。

注(23) ゴドウィンのパーク観については、拙著「ウィリアム・ゴドウィン研究」128—134ページ参照。

注(24) ゴドウィンは1791年に、ペインの「人権論」を出版するために、ホルクロフトや T. B. Hollis などと協力している。ペインにおける社会と政府の区別が、ゴドウィンに引きつがれていることは言うまでもない。

注(25) L. Stephen, *History of English Thought in the Eighteenth Century*, 1902, vol. II, pp. 265-6. 中野好之訳(下) 143ページ。ステューヴンはヒュームとハートリーの影響を重視するところに特徴がある。

注(26) J. Plamenatz, *The English Utilitarians*, 1949, pp. 89-90.

注(27) E. Halévy, *The Growth of Philosophic Radicalism*, translated by M. Morris, p. 193.

注(28) F. E. L. Priestley, *Introduction to Political Justice*.

注(29) William Hazlitt, *The Spirit of the Age*, 1825. 神吉三郎訳 40 ページ。

ことからわかる。しかし、このヨーロッパ最大の専制君主政体の崩壊がイギリスの社会に与えた衝撃は非常なものであって、フランス革命を導いた啓蒙思想に対する絶大な信頼と、イギリスの政治体制に対する厳しい批判、それに促進された急進主義運動の展開、ひいては、「政治的正義」が出版された時に熱狂的にこれを迎えた読者をつくりだしていた。そしてフランス革命をめぐる支配階級と急進主義の間に激しい論戦が展開され、パークの「フランス革命の省察」が支配階級の反動思想を確立したのに対して、ゴドウィンの「政治的正義」は、パーク批判の総決算という意味も持っていたのである。

「政治的正義」は、1791年5月に計画され、その9月に書き始められて、16カ月の異常な努力によって出来上った。彼はその日記において、

“私の最初の考えは、モンテスキューの不完全さと誤まりに対して反対する感情と、もっと欠点の少ない書物を出したいという願いから出発した。その最初の熱情の際に、その本来の力と重さによってすべて

の反対を圧倒し絶滅して、政治学の原理を泰山の安きに置くような「一つの石を岩から切り取る」ことを想像した。

と記している。従ってゴドウィンの批判は、パークの上を通り越して直接モンテスキューに対決を挑んだものであった。「政治的正義」の中でモンテスキューに触れているところは極めて少ないので、この表現はやや意外であるが、これは、イギリス憲法を過大に評価し、法律制度の改革による社会の改善をはかり、また政治方式の差などを気候などの物理的原因に帰したモンテスキューの考え方を批判しようとしたのである。そして彼のモンテスキュー非難は、彼が、イギリス憲法体制のみならず、一切の法体系による改善から彼自身を断絶させたことを意味する⁽³¹⁾。こうしてゴドウィンの体系は、パークもフランス革命も越えて、政治制度全体の否定へ、さらに私有財産制度全体の否定へと迫り、そのゆえに、時論としての一時的な盛衰の波によってではなく、その深部において今日に問題を提起するのである。

注(30) C. K. Paul, *William Godwin: His Friends and Contemporaries*, 1876, vol. I, pp. 10-11.

(31) モンテスキュー批判の意味について、ビューアリは次のように言う。“モンテスキューの政治哲学の特質は、社会制度を尊重したことである。ゴドウィンの原理は、社会制度は全く有毒であり、またこれは有害な偏見を永続させ、改革に対してほとんどちかつことのできない障害だということである。” John Bangal Bury, *The Idea of Progress—An Inquiry into its Origin and Growth*, 1920. 高里良恭訳 224 ページ。さらに水田珠枝氏によれば、モンテスキューの「法の精神」(1748)がイギリス思想界に与えた影響は、a. イギリスは政治的自由を憲法の目的としている唯一の国家であり、三権が分立して君主政治、貴族政治、民主政治のそれぞれの長所を備えているという指摘、b. 立法権が執行権より腐敗した場合には、イギリスは滅亡するだろうという予言、の二点に要約される。これはブラックストウンやドロールムなどの法学者による既存法制度の註解と擁護、立法部の改善、強化の要求など、18世紀の保守・急進両派の共通のとりでとなつたので、“ゴドウィンのモンテスキュー批判は、当時の思想界に対する彼の姿勢を示すものである。”「変革思想としての無政府主義——ゴドウィン『政治的正義』における人間変革の問題——」, 名古屋大学法政論集第13輯, 1959年 38 ページ。

またブリーストリによれば、モンテスキューの「法の精神」はロックの「政府二論」以来最も影響力のある政治論で、政治形態の差を気候などの物理的原因に帰した点。イギリスの憲法体制を賞讃したことをゴドウィンは批判した。均衡を得た三権分立政体に対する過信は、当時の急進派の間でも根強かつた。Cf. F. E. L. Priestley, *Introduction to Political Justice*, in his edition, vol III, pp. 4, 7, 41.

有効需要と経済成長*

川島康男

一. 序

ケインズ体系によって、我々は金融財政政策の効果が経済全体にどのような影響を与えるかを知ることができるようになった。そこでは諸政策が有効需要水準に影響し、それが更に雇用や物価にどういう効果を与えるかが分析されている。しかしながら、ケインズ体系の一部をとり出して動学化した Harrod-Domar のモデルや新古典派のモデルでは、我々の関心は需要面よりもむしろ供給面に移った。

その理由としては、サムエルソン〔1〕も指摘するように、現在の混合体制の下では政府による有効需要のコントロールがかなりうまく行われるようになり、その結果として結局供給側の要因が経済の成長を規制することになったと考えられる。更に、この命題の正しさが、現実に於ても歴史によってある程度、検証されたことにもよろう。

他方、理論それ自体の構造を考えると、*Warranted Rate of Growth* G_w と *Natural Rate of Growth* G_n との関連を議論の中心にしたことが、経済成長率が需要よりもむしろ供給側の要因によって規制される、という結果を導くのに大きく影響したと思われる。

しかし経済成長理論の構造がどうであれ、現実には経済の短期的変動の調整のために、需要水準に大きな効果をもつ各種の政策がとられている。この点は現在の経済成長論では、十分な考慮が払われているとはいえない。政策が需要水準に及ぼす効果をもっと明示的に示すためには、政策の効果をモデルの中に導入せねばならない。これはすでに有効需要の原理を活用することによって、実現されている。静学体系では、諸政策の有効需要水準への効果が分析された。し

かしこの静学体系を一步進めれば、我々は諸政策の有効需要の成長率への効果を通じて動学的体系を得ることができる。それが実現したときに、諸政策の有効需要成長率、ひいては経済成長率への効果をも知ることができる。

我々はこのような試みを、サムエルソン〔1〕の静学モデルを出発点として、行うことにしたい。

二. 静学モデル

先ずサムエルソン〔1〕のモデルを再述しよう。そのために、次のように記号を定義することにしよう。

- Y_E: 有効需要
- Y: 産出量
- K: 資本ストック
- L: 労働量
- L^D: 労働需要量
- F: 生産関数
- I: 投資
- S: 貯蓄

以上のような記号を使うなら、我々のモデルの生産関数は

$$(1) Y = F(K, L^D)$$

という関係で示すことができる。ここでFは新古典派の生産関数である。

また社会の貯蓄は国民所得の関数であり、その貯蓄と外生的に決まる投資の均衡から、社会の有効需要水準 Y_E が決まる。つまり

$$(2) I = S$$

を得る。但し(2)は有効需要水準を決定する式である。

一方この社会の企業は資源の制約がなければ、投資貯蓄の均衡式で決まる有効需要を常に生産するものと

* 本稿の作成にあたり、私は大熊先生をはじめ、多くの人々から有益なコメントを得た。記して感謝の意を表したい。しかし誤りがあるとすれば、それはすべて私個人の責任によるものである。